

没後50年 20世紀音楽の巨匠“ストラヴィンスキー”

プログラム

今年は20世紀音楽を代表する巨匠ストラヴィンスキーの没後50年の記念の年に当たります。まだ50年しか経っていませんが、ストラヴィンスキーの名はすでにクラシックとなっています。今回はストラヴィンスキーの魅力を伝える名曲と名演奏でお楽しみください。

イーゴリ・ストラヴィンスキーは1882年6月17日、ロシア、ペテルブルク郊外のオラニエンバウムで生まれました。父は著名なオペラ歌手で、9歳からピアノを習い始め、グリムカのオペラに感銘を受けたり、チャイコフスキーやリムスキー＝コルサコフ等の作品を知るにつれ、作曲家への憧れが強くなって行きました。しかし父は法律を学ぶ事を勧め、ペテルブルクの大学に入りますが、在学中に知り合ったリムスキー＝コルサコフの息子の紹介で本格的に作曲を志す決心を固めました。大学を続けながら2年間リムスキー＝コルサコフから作曲法や管弦楽法を学び、師の指導のもとに1903年のピアノ・ソナタを皮切りに交響曲第1番、師の令嬢の結婚祝いとして書かれた管弦楽曲「花火」、幻想的スケルツォなど独自性にあふれた秀抜さの片鱗を見せ始めます。これらが初演されるとロシア・バレエ団の主宰者ディアギレフに注目され、彼の委嘱によって完成された「火の鳥」が1910年6月にパリのオペラ座で初演、大成功を収めると、翌11年にはロシア・バレエ団委嘱の第2作「ペトルーシュカ」を短期間で書き上げ、これも大成功、ストラヴィンスキーは作曲家としての地位を確立します。しかし1913年5月にパリのシャンゼリゼ劇場で初演された第3作の「春の祭典」が一代スキャンダルを巻き起こします。暴力的なリズムが支配する強烈な音楽に劇場は大混乱となりました。今日では20世紀音楽の金字塔とも言える傑作として評価されていますが、それだけ当時としては衝撃的で斬新な音楽だったのです。3大バレエを代表作とした民族主義的原始主義と呼ばれる第1期のあと、「ブルチネルラ」や詩編交響曲を代表とする新古典主義の時代が第2期、1953年の七重奏曲に始まる晩年の時期が第3期と言われています。この時期はバレエ音楽「アゴン」、レクイエム「イントロイトゥス」等、12音技法を積極的に取り入れた宗教的で、内面的表現を追求した作品が多くなりました。1945年頃からは指揮活動も始め、1959年にはNHK交響楽団を指揮するため来日していますが、1967年を最後に引退、作曲も1966年以降新作はなく、1971年4月6日ニューヨークで88年の生涯を終えました。

(中川)

イーゴリ・ストラヴィンスキー (1882~1971): 舞踊組曲“フルチネルラ”

小澤征爾指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(1993.1.27 ケルン・フィルハーモニーホールでのLive)

舞踊組曲“火の鳥”(1919年版)

カルロ・マリア・ジユリーニ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1991.9.14 ベルリン、シャウシュピールハウスでのLive)

*** 休憩 ***

ヴァイオリン協奏曲ニ長調

ヒラリー・ハーン (ヴァイオリン)
エリアフ・インバル指揮ウィーン交響楽団
(2001.2.2 ウィーン・コンツェルトハウス大ホールでのLive)

舞踊音楽“春の祭典”

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1971.9.25 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

曲目解説

舞踊組曲「プルチネルラ」

ロシア・バレエ団の主宰者ディアギレフとの出会いが3大バレエを生み、ストラヴィンスキーとロシア・バレエ団の栄光の時代は続いて行きました。1920年、イタリア音楽を用いたバレエを積極的に制作していたディアギレフは、ペルゴレージの楽曲を用いたバレエ音楽「プルチネルラ」を構想、大規模な編成による編曲をストラヴィンスキーに依頼しますが、ストラヴィンスキーは小編成で現代的な和声やリズムを用いた編曲に変更、ディアギレフもその出来栄に賛辞を送りました。初演は1920年5月15日、パリ・オペラ座でアンセルメの指揮で行われ、大成功を収めました。物語は「女性にもてはやされていた主人公プルチネルラが、嫉妬する男から殺されそうになり、身代わりを使って難を逃れ、最後には恋人と結ばれる」というもので、1922年、ストラヴィンスキーはこのバレエ音楽から抜粋して組曲として編集しました。今日ではバレエとしての上演はほとんどありませんが、組曲として演奏会でもたびたび取り上げられ、親しまれています。新古典主義時代を代表する名曲です。

- | | |
|---------------------------|-------------------|
| 第1曲 シンフォニア（序曲） | 第2曲 セレナータ |
| 第3曲 スケルツィーノ～アレグロ～アンダンティーノ | 第4曲 タランテラ |
| 第5曲 トッカータ | 第6曲 2つの変奏のあるガヴォット |
| 第7曲 ヴィーヴォ | 第8曲 メヌエット～フィナーレ |

舞踊組曲「火の鳥」（1919年版）

セルゲイ・ディアギレフとロシア・バレエ団委嘱の第1作で、最初1910年のシーズンの新作として、ロシア民話に基づくバレエ「火の鳥」の上演を思い付いたディアギレフは、ロシア・バレエ団の指揮者を務めていた作曲家ニコライ・チャエプニンに作曲を依頼しますが、うまくいかず降板、注目していた新人ストラヴィンスキーに依頼し、1910年6月25日、パリ・オペラ座でピエルネの指揮で初演、「音楽の世界に革命が起きた」と一大センセーションを巻き起こしました。オーケストラから放たれるまばゆいばかりの響きは、これまで経験のなかったもので、無名だったストラヴィンスキーの名を一躍有名にした記念すべき傑作です。「黄金色の羽根を持つ火の鳥を捉えたイワン王子は、哀願する火の鳥を放してあげるお礼に魔法から身を守る羽根をもらう。魔王カスチエイの囚われの身の王女に恋した王子は魔法で王子を石にしようとする魔王に火の鳥からもらった羽根で難を逃れ、王女を救い出し、二人は愛を誓う」という物語で、リムスキー＝コルサコフの息子アンドレイに献呈されました。全曲版の他、1911年、1919年、1945年の組曲版がありますが、今日では1919年版が最も多く演奏されています。

- | | | |
|------------------|--------------|--------|
| 第1曲 イントロダクション | 第2曲 火の鳥とその踊り | |
| 第3曲 火の鳥のヴァリアシオン | 第4曲 王女たちのロンド | |
| 第5曲 カスチエイ王の凶暴な踊り | 第6曲 子守歌 | 第7曲 終曲 |

ヴァイオリン協奏曲ニ長調

ストラヴィンスキーは、1930年アメリカのヴァイオリニスト、サミュエル・ドゥシユキンと出会い、ヴァイオリン協奏曲の作曲依頼を受けました。曲は1931年春に着手、9月に完成し、10月31日、ドゥシユキンのヴァイオリンとストラヴィンスキーの指揮で初演されました。それまでヴァイオリンは彼にとっては未知の楽器で、ドゥシユキンに書き上げた音が弾けるかどうか確認しながら完成させたと言われています。独特のリズム、モダンな音色を持ち、軽妙な響きと美しさが魅力の名曲です。

- | | | | |
|------------|-----------|------------|-------------|
| 第1楽章 トッカータ | 第2楽章 アリアI | 第3楽章 アリアII | 第4楽章 カプリッチョ |
|------------|-----------|------------|-------------|

舞踊音楽「春の祭典」

ストラヴィンスキーはディアギレフとロシア・バレエ団委嘱第1作「火の鳥」の大成功の後、1911年に短期間で書き上げた第2作「ペトルーシユカ」でも成功を収め、1913年に第3作「春の祭典」を完成させました。120回のリハーサルののち、1913年5月20日、パリのシャンゼリゼ劇場でモントゥーの指揮、ニジンスキーの振り付けで初演。しかしその日のシャンゼリゼ劇場は大混乱となり、大スキャンダルを巻き起こしました。むき出しの荒々しく暴力的なリズムが支配し、狂ったような強烈な音楽に劇場は大混乱となりました。賞賛の声もありましたが、罵声の音が圧倒的に多く、当時の新聞には「春の“災”典」という見出しが載ったほどで、初演は失敗に終わりました。しかし2回目の公演以降は大きな混乱はなく、初演時、衝撃的で斬新な音楽だったこの作品も、今日では20世紀音楽の金字塔とも言える傑作として評価されています。「ロシアの異教時代の原始的な儀式のため、ひとりの処女が生贄に選ばれ、踊り狂ううちに祭壇の前で倒れる」までを圧倒的な音楽語法で描きます。現在ではバレエの公演よりもコンサートプログラムで頻繁に取り上げられています。

- | | |
|-----------|-----------|
| 第1部 大地の礼賛 | 第2部 生贄の儀式 |
|-----------|-----------|